

令和 2 年 9 月 22 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H05715

研究課題名(和文)越境する社会科学からアプローチする比較日本文化研究

研究課題名(英文)A comparative studies of Japanese culture from the view point of trans social sciences

研究代表者

丹野 清人 (TANNO, KIYOTO)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：90347253

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,600,000円

研究成果の概要(和文)：日本文化の特徴を、社会学、文化人類学、政治学、歴史学、地域研究といったさまざまな社会科学から見ることで、相対的にかつ普遍的に捉えることとした。ただし、その際にはフォーカスポイントを社会運動におき、日本の社会運動がそれぞれの学問領域から見たときに、どのように把握できるものであるのかを研究した。我々は、共同研究を通して、アモルファスな状態認識を共通の視点として持つことを発見し、この視点から日本文化の位置づけを行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本社会の特徴を国際発信することに努めた。英語論文も複数発表したし、研究代表者は2018年に秋篠宮眞子内親王がラテンアメリカへの日本移民120周年祭に出かける際には、本研究成果を120周年祭に向けての事前学習として秋篠宮邸御進講をおこない、ブラジル、アルゼンチン、ペルーでの記念式典のスピーチにも本研究の成果を反映させることができた。本研究は、研究代表者のこのような活動のほかに、多くの実践的な場所で用いられており、単なる学術研究を超えて社会に研究成果を発信することができたと考えている。

研究成果の概要(英文)：By observing the characteristics of Japanese culture from various social sciences such as sociology, cultural anthropology, politics, history, and area studies, we decided to capture this relatively and universally. However, at that time, we put the focus point on the social movement. We studied how Japanese social movements can be grasped when viewed from their respective disciplines. Through joint research, we discovered that we can have an amorphous state recognition as a common viewpoint, and positioned Japanese culture from this viewpoint.

研究分野：社会学

キーワード：越境する社会科学 アモルファス アモルファスな状態 社会運動

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、社会現象のグローバル化が当たり前のこととして受け止められるようになった。かつては、人の移動に多くの注目が集まったが、今や人は国境を超えて移動することは当たり前のこととなった。それよりも、人の移動を当たり前のものとしつつ、相変わらず国境を単位とした文化の単位は根強く残り続け、溶解すると思われた国境が経済危機やパンデミックなど、グローバル化がもたらす危機がサイクリカルに発生することで、むしろ耐えざる再定義が行われている。

こうした社会状況の変化と軌を一にして、学問領域・アカデミックディシプリンの間でも境界の乗り越えが頻繁に見られるようになってきた。このような社会的状況、学問的状況を念頭において、グローバル化の進む日本社会のあり方を、社会学、政治学、歴史学、地域研究の異なるバックボーンを持つものが共通の認識を持ったり、共通の方法論を打ち立てたりすることができるのか、という問題意識から本研究プロジェクトは企画された。

また、変化するグローバル社会と地域社会を架橋する理論的な方法を打ち立てる可能性についても強く意図していた。しかし、学問的ディシプリンが異なるだけでも共通の認識枠組みを作るのは困難でもあるし、さらにグローバルに異なる社会の状況をも把握することが果たしてできるのか、ということもまた危惧していたが、とにかく方法論の確立もトライすることにした。

2. 研究の目的

日本社会に関する国際的な理解としては、西欧とは異なるとする日本特殊論で語られることもあれば、西欧由来の理論的枠組みである普遍的な理論モデルが十分働く社会として捉えられることもある。しかしながら、日本社会を特徴付ける日本文化はルース・ベネディクトの『菊と刀』に典型に見られるように、欧米人には分かりにくい・理解しにくいものとしてあることは標準的な認識であろう。その一方で、近年、分かりにくいとされてきた日本文化は、アニメに代表されるクールジャパンとして世界を魅了している。理解しにくいのではなく、むしろ世界が日本に近づいてきてもいる。そうであるならば、日本の文化や社会を読み解くアプローチは、単に日本社会を読み解くだけではなく、世界の他の国や他の文化における人々の行動を理解する枠組みをも提示する可能性がある。とりわけ、文化という側面は、すべての人々がその中で生きているにも拘わらず、すべての人が納得出来るような説明枠組みとして説明することは極めて難しい。本研究では、このような説明枠組みとしての文化を説明するものが企画された。

しかし、一定の共通の対象は必要であろうということで、人間の文化的特性が表れる対象となり得る集合行動として、一定の社会的な意味が込められつつ、そこには非論理的と思われがちな感情の動きも大きなモメントとなる大衆行動・デモをその研究対象とすることにした。さまざまな対象・場所で行われるデモの共通の説明枠組みを求めるものとしたのである。そしてその説明枠組みは、日本のデモを説明するだけでなく、アメリカやヨーロッパ、東南アジア、南米、アフリカのそれをも説明出来るようにすることが目的と定められた。

3. 研究の方法

一つには、日本で行われた集合行動の文献史的な調査である。とりわけ、集合行動に参加した当事者の残した記録、さまざまな団体の機関誌等について可能な限り集め、当時の声を残したもののへのインタビューも行い、その当時どのような思いで集合行動に参加していたのか、当時はこのように書き残しているけれども、その評価は今でも変わることはないのか、といった当事者にとっての主観的な評価の変遷について行う。いま一つは、研究対象となる集合行動があると聞いたときには、可能な限り参加し、そこに集まる人々への聞き取り調査も随時行う。上記のように、本研究の一次資料として集められる資料は史的資料としての当事者が残した活字情報、そして現代の運動に集まる人々へのインタビュー調査から集められた「生の言葉」がその研究対象としてデータに据えられる。

その上で、かつての集合行動、1970年代までの学生運動や労働運動が強かった時代のものを Organization driven (組織主導) な運動であり、それが現代では Individual driven (個人主導) な運動であって、組織は不定型なものとして形成されている。そこでは、個人が集まったときにその瞬間だけの組織 (Amorphous organization) が成立しているとの仮説を立てた。そして、その瞬間に組織として成立する個人の関係がどのようなものであったのかを、集められたデータから検証するという形で論証していくこととした。さらに、個人と個人の繋がりもなかで、あるいは個人と集団・組織との繋がりもなかで、どのような意味が集合行動に付加されていくのかを解明していくことで、集合行動そのものの変化を理解するものとした。手法としてはアモルファスをキー概念において構築主義的な集合行動理解となるものである。

4. 研究成果

研究成果は、これまで毎年報告書に記載してきたように多数の論文・学会報告等に詳細は記載してあるので、ここでは研究成果の概要を記載する。本研究は、当初はさまざまな領域を検討したが、最終的には集合行動、とりわけ大衆の抗議運動としてのデモに焦点を当てることとした。近年、反グローバリズムであったり、反人種差別であったり、世界は異なる文脈におかれていても、人々が抗議をすることが普遍的に見られる。そのことは、テレビや新聞でも伝えられ、広く

知られることでもある。しかも、世界中で、共通の特徴が見られるのだ。それは、デモがどこか特定の団体や特定の政党の指導の下で行われているというのではなく、さまざまな組織的背景をもった者がそこに加わるだけでなく、組織的な背景を一切持たない個人が多く参加していることである。だからこそ、在る一瞬に広がる傾向が極めて強く、かといってその一瞬だけで終わることもなく細々とも続いていく、という二面性をもった集合行動になっているのだ。

このような集合行動の説明枠組みとして、本研究チームは「アモルファス」をキーコンセプトに選んだ。アモルファスは、自然科学における状態を表す概念である。すべての単位が均質で、その均質な単位のものが規則正しくならぶものが結晶(クリスタル)であるのに対して、アモルファスは単位となるものは異質な特性を持っていて、その異質な特性を持っているものがランダムに並び結合する状態がアモルファスとなる。クリスタルな構造を持つ物質はある特定の方向からの力には強いが、別の方向から力を入力されると簡単に壊れたりする。それに対して、ランダムに相互が結びついているアモルファスな物質は、あらゆる方向から力を加えられても耐えるような性質を持つようなことにもつながる。例えば、チタンを利用する際に純チタンではなく、アルミニウムをわずかに添加してクリスタルをアモルファス化させたり、セメントの骨材に同じ大きさ形の石を入れるのではなく、さまざまな不揃いの形・大きさの採石を混ぜたりするのもアモルファスの利用である(コンクリートの強度はアモルファス度が高いほど強くなる)。

本研究では、現代の集合行動としてのデモの特徴は、さまざまな属性を持った人々がアモルファス的に集まった状態であり、それが上記のチタンやコンクリートの例のような固体化されて不変の状態となるのと異なって、在る一瞬の状況としてアモルファスな状態になっている、ということにもとめた。そして、集合状態がアモルファスであるということを認識すると、政党や労働組合といった既存の組織は弱まり続けているにも拘わらず、なぜデモのような集合行動が起きるのか。政党や労働組合といった中間集団を欠いた集合行動は、これまでの資源動員論等では一時の集団の感情が沸騰したような非理性的なものとしてしか理解されてこなかったものに対して、現代の人々が個人化されつつも社会の一定の価値観を共有している状況を示すものであって、その積極的な意味理解を可能にするということを提示することができた。

なお、本プロジェクトを科研費に応募したときには、研究成果を研究期間の最後に英語で出版する、ということを書いていた。残念ながら研究期間最終年度内に英文出版をすることはできなかったが、英文出版の準備はできていた。本研究成果は、予定より10か月ほど遅くなってしまったが、Horie Takashi, Tanaka Hikaru and Kiyoto Tanno eds., 2020, *Sociology of Amorphous Diecent*, Trans Pacific Pressとして公刊することになっている。第一章は、Horie Takashi, Tanaka Hikaru and Kiyoto Tanno, *Amorphous Diecent: A conceptualization*、第二章は Kinoshita Chigaya, *What have post-311 social movemens changed?*、第三章は、Horie Takashi, *Post 311 social movements and politics*、第四章は、Tanaka Hikaru, *Amateur revolt: The amorphous social movements resisting the system*、第五章は、Toriyama Atsushi, *Twenty years of confrontation: against the ossification of US Military Bases in Okinawa*、そして最終章が Tanno Kiyoto, *Opposing hate speech in Japan: Valuing differences and Breaking new ground for human rights* である。ゲラの確認も終えており、参考文献表の作成も終えた。最終成果を英文で公刊するところまでたどり着けたことは、十分な成果を収めることができたと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 丹野清人 | 4. 巻 28号 |
| 2. 論文標題 法的制度と社会のはざまでもがく外国人労働者 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 日本労働社会学会年報 | 6. 最初と最後の頁 83-98 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 田中ひかる | 4. 巻 27号 |
| 2. 論文標題 現代アナーキズムから見たロシア革命 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 初期社会主義研究 | 6. 最初と最後の頁 5-21 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 田中ひかる | 4. 巻 77号 |
| 2. 論文標題 現代のアナーキズムから見たロシア革命 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 ピープルス ブラン | 6. 最初と最後の頁 44 - 49 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 田中ひかる | 4. 巻 55号 |
| 2. 論文標題 ロシア出身のユダヤ系移民女性がアナーキストになった要因に関する考察-移民前のロシアでの経験に焦点を当てて | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 歴史研究 | 6. 最初と最後の頁 51 - 79 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 堀江孝司 | 4. 巻 566 |
| 2. 論文標題 安倍内閣をめぐる世論の動向と野党 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 労働調査 | 6. 最初と最後の頁 14-19 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------|
| 1. 著者名 TANNO Kiyoto | 4. 巻 34号 |
| 2. 論文標題 Perspective on the Problems of Foreign Labor: Enacting Employment Policies that Encourage Long-Term Residence | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 Discuss Japan | 6. 最初と最後の頁 1-2 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) http://www.japanpolicyforum.jp/archives/economy/pt20161015015734.html | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 堀江孝司 | 4. 巻 700号 |
| 2. 論文標題 安倍政権の女性政策 | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 大原社会問題研究所雑誌 | 6. 最初と最後の頁 38-44 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 木下ちがや | 4. 巻 21号 |
| 2. 論文標題 経験の共同と変革主体形成について : 知識人と運動/政治とのかかわりをめぐって | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 唯物論研究年誌 | 6. 最初と最後の頁 53-67 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 木下ちがや | 4. 巻 2017年1月号 |
| 2. 論文標題 時代遅れのコンセンサス トランプの勝利は何を意味するのか | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 現代思想 | 6. 最初と最後の頁 210-218 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 4件)

| |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名 丹野清人 |
| 2. 発表標題 日本の外国人労働者の30年 |
| 3. 学会等名 2017年 第30回日本南アジア学会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2017年 ~ 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Hikaru TANAKA |
| 2. 発表標題 Japanese Anarchistic Social Movements in Global and Historical Perspective |
| 3. 学会等名 The 2017 Biennial Conference of the Japanese Studies Association of Australia (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 ~ 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 田中ひかる |
| 2. 発表標題 ロシア出身のユダヤ系移民によるアナーキズム運動 - 人の移動と思想・運動の形成 - |
| 3. 学会等名 2017年 第61回 ロシア史研究会年次大会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2017年 ~ 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Takashi HORIE |
| 2. 発表標題 From anti-nukes to anti-Abe: State of Japanese Social Movements in Post-Fukushima Era |
| 3. 学会等名 The 2017 Biennial Conference of the Japanese Studies Association of Australia |
| 4. 発表年 2017年～2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 TANNO KIYOTO |
| 2. 発表標題 LGBT Foreign National and Sociology of Deportation |
| 3. 学会等名 XI Congresso Internacional de Estudos Japoneses no Brasil (国際学会) |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名 丹野清人 |
| 2. 発表標題 法的制度と社会の本音のはざまでもがく外国人労働者 |
| 3. 学会等名 日本労働社会学会 |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 YOSHIDA Mai |
| 2. 発表標題 Foreign Trainee System and Japanese-style Management: Intimate attention and exploitatio |
| 3. 学会等名 Hokkaido Summer Institute (国際学会) |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名 田中ひかる |
| 2. 発表標題 趣旨説明 現代アナーキズムから見たロシア革命 |
| 3. 学会等名 初期社会主義研究会・関西アナーキズム研究会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 TANAKA Hikaru |
| 2. 発表標題 Die Geschichte und Gegenwart des japanischen Anarchismus |
| 3. 学会等名 Allgemeines Syndikat (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計3件

| | |
|------------------------------------|--------------------|
| 1. 著者名 田中ひかる | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 ミネルヴァ書房 | 5. 総ページ数 298ページ |
| 3. 書名 社会運動のグローバル・ヒストリー：共鳴する人と思想 | |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 丹野清人 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 吉田書店 | 5. 総ページ数 261ページ |
| 3. 書名 「外国人の人権」の社会学：偽装査証、少年非行、LGBT、そしてヘイト | |

| | |
|--------------------|--------------------|
| 1. 著者名 吉田舞 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 風響社 | 5. 総ページ数 292ページ |
| 3. 書名 先住民の労働社会学 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|--|----|
| 研究分担者 | 田中 ひかる (TANAKA HIKARU) (00272774) | 明治大学・法学部・専任教授 (32682) | |
| 研究分担者 | 吉田 舞 (YOSHIDA MAI) (50601902) | 特定非営利活動法人社会理論・動態研究所・研究部・研究員 (95401) | |
| 研究分担者 | 木下 ちがや (KINOSHITA CHIGAYA) (50772050) | 明治学院大学・国際平和研究所・研究員 (32683) | |
| 研究分担者 | 鳥山 淳 (TORIYAMA JUN) (60444907) | 琉球大学・島嶼地域科学研究所・教授 (18001) | |
| 研究分担者 | 堀江 孝司 (HORIE TAKASHI) (70347392) | 首都大学東京・人文科学研究科・教授 (22604) | |